

2020(令和2)年度

鳥取県NIE実践報告書



教育に新聞を
Newspaper in Education



鳥取県NIE推進協議会

目次

- 巻頭言「ノブレス・オブリージュの今日的意義」…………… 1
鳥取県N I E推進協議会長 藤田 安一
- 2020年度鳥取県N I E実践指定校の報告
 - ① 主体的に学び、自ら考え進んで表現を深めるN I Eの取り組み …… 2
鳥取市立逢坂小学校
 - ② 新聞活用による「探究基礎」と各教科の実践（N I E実践報告2年次） …… 8
青翔開智中学校・高等学校
 - ③ N I E実践報告書 …… 15
鳥取県立八頭高等学校
 - ④ 岩美高等学校N I Eの取り組み …… 19
鳥取県立岩美高等学校
- 第25回N I E全国大会・東京大会（オンライン開催）に参加して …… 27
 - つながり持てる重要媒体
鳥取県N I E推進協議会長（鳥取大学名誉教授） 藤田 安一
 - 学びに効果的な教育活動
鳥取県N I E推進協議会アドバイザー 岩井 克之
 - 新聞活用し社会に関心
鳥取市立逢坂小学校 教諭 泉 政則
 - コロナ禍でもつながる
青翔開智中学校・高等学校 司書 横井麻衣子
 - 生徒が思考する授業を
鳥取県立八頭高等学校 教諭 下谷 慎一
 - どこから読んでもいい
鳥取県立岩美高等学校 教諭 栗原由紀子
- 鳥取県N I E推進協議会 会則 …… 30
- 「出前授業」募集のご案内 …… 32

ノブレス・オブリージュの今日的意義

鳥取県 NIE 推進協議会長

藤田 安一（鳥取大学名誉教授）



現在、世界は新型コロナウイルス感染症によるパンデミックの渦中にある。その押さえ込みに各国が懸命に取り組んでいる中、わが国もこれまで3度の緊急事態宣言を出して対応しているが、思うような成果がみられず東京オリンピック・パラリンピックの開催が危ぶまれる事態となっている。

そのような状況下、大学での講義が終わって学生と談笑していたとき、ある学生の言葉が印象に残った。

「世間では、コロナの感染拡大の原因が、われわれ若者の行動にあるかのように批判しています。しかし、国民に自粛を呼びかけている政治家や官僚が、銀座の高級料亭やバーで夜遅くまで会食している姿が報道されるたびに、自分たちが自粛していることがばかばかしくなります」

確かに、緊急事態宣言下にもかかわらず政治家や官僚による多人数の会食や深夜におよぶ飲食が発覚し、マスコミ報道を賑わしてきた。菅首相自身も、自ら進めてきたGoToトラベルが全国的なコロナ感染拡大の一因となっているとの批判を受け、全国一斉停止を宣言した昨年12月14日、芸能人や著名人8人と一人数万円におよぶ高級焼肉店で会食していた事実が発覚した。

しかも首相は、この会食が原因でマスコミや国民から批判を受けて反省を表明した2日後の16日に、2件はしごで会食をおこなっていたというから、もう開いた口がふさがらない。提唱者が自ら決めたルールを破って好き勝手。これでは、いくら国民に自粛を呼びかけても効果がないのは当然であろう。

ノブレス・オブリージュという言葉がある。身分の高い者は、それに応じて果たさなければならない社会的責任と義務があるという伝統的な考えだ。現在でも、欧米社会における基本的な道德観となっている。「身分の高い者」と言えば、少々封建的なニュアンスを感じるが、「指導的立場にある者」と置き換えれば、十分に今日的意義をもつ言葉である。

わが国においても、明治維新以降の近代化の過程でノブレス・オブリージュは、立憲君主国であるイギリス王室をはじめとするヨーロッパの慣例に倣って、戦前まで日本の皇室でも実施されてきた。「皇族男子はすべからず軍人たるべし」との考えのもとで、戦前の皇族男子のほとんどが海兵か陸士のいずれかに進んだし、多くの旧大名や公卿などの華族たちも同様であった。

上流階級に属する彼らは、戦前さまざまな特権を付与されていたが、それと引き換えに戦争になれば、自ら先頭に立って戦う責任と義務を自覚していた。そのために、戦場で死傷した皇族・華族は少なくなかったのである。

ひるがえって、現在わが国で政権を担っている政治家や官僚の行いをみると、言行不一致でも自分たちは特別な存在だから許されるという特権の意識があまりにも強すぎる。他方で、国民のための政治を行う責任感や義務感の欠如が甚だしい。権力者への忖度（そんたく）が常識になっている昨今の政治が、見事にそれを表している。

主体的に学び、自ら考え進んで表現を深めるNIEの取り組み

鳥取市立逢坂小学校 泉 政則

1 はじめに

2020年度の本校の研究主題は、「自分の思いや考えを持ち、豊かに表現し、共に高まり合う子どもの育成」である。その主題を実現するために、19年度の実践を引き継ぎつつ、各教科の狙いを中核としながらNIE活動に取り組んできた（「授業実践部」、「全校共通部」、「環境整備部」）。小規模校である本校にとって、NIEの活動は有効だと考える。その理由として、「新聞記事を通して、より多くの他者の考えと出会い、その考え方を学ぶことができる。」「少人数の中の固定化した考え方を広げることができる」などが挙げられる。またNIE活動の良さとしては、

- 身近な地域の話題・写真等、児童にとって興味が湧く。教材と児童の生活をつなぐ。（興味）
- 自分の考えと現実とに矛盾に気づいたり、疑問が解決されたりする。（知識・思考）
- 多くの情報が載っている新聞を読むことで、情報を探す力が身につく。（情報収集力・比べる力）
- 新聞の書き方（見出し、レイアウト、構成など）を学び、まとめる力がつく。（構成力、発信力）などが考えられる。ここでは、児童が新聞を活用しながら主体的に学習に取り組み、「進んで学習に取り組み力」「情報収集し、知識を獲得する力」「比べる・考える・まとめる・発信する力」を身に付けるために取り組んだ実践を紹介したい。

2 実践内容

（1）新聞を活用した「授業実践部」の取り組み

〈低学年（1年）国語科（漢字の学習）〉

〈目標〉新聞に載っている漢字から学習した漢字を見つけることができる。

〈実践〉

- ・新聞紙を一人1枚ずつ配る。必要な児童は、教科書などを準備する。（学習したかどうかを確かめる。）
- ・制限時間は10分。限られた時間の中で学習した漢字を見つける。
- ・最後に、いくつ見つけたのか数え発表し合う。

○どの児童も限られた時間の中で、1つでも多くの漢字を見つけようと意欲的に学習に取り組んでいた。中には100字以上の漢字を見つけることができた児童もいた。何個見つけたのか数を数えることは、算数の学習にもつながっていく。この取り組みは、1年生の学習としては、漢字だけではなく平仮名、片仮名を見つける学習にも有効である。

〈中学年（4年）国語科「地域の人に新聞で伝えよう！『今年の逢坂小学校』」〉

〈目標〉地域の人に向けて今年の逢坂小学校の様子を伝える新聞を作る活動を通して、相手や目的を意識して伝えたいことの中心を明確にしたり、文章構成を考えたりすることができる。

〈実践〉

- ・新聞社の方をゲストティーチャーとして招き、実際の新聞を使って新聞の特長を学ぶ。



- ・2チームに分かれて、コロナ禍での逢坂小学校の頑張りを伝える新聞を作成する。
- ・取材カードを活用しながら、アンケート調査を取り入れた取材を行う。
- ・トップ記事を決め、割り付けについて話し合う。
- ・読者の読みやすさを考えながら記事を書き、伝えたい内容に合った見出しを考える。
- ・写真や図表を効果的に使いながら、新聞を仕上げる。
- ・作った新聞を使って逢坂小学校の様子を他校の友達に伝えたり、公民館に掲示し地域の人に逢坂小学校の頑張りを伝えたりする。



○単元の導入時に新聞社の方に来ていただき、新聞の特長や事実を分かりやすく伝えるための工夫について教えていただき、新聞作りへの意欲が高まった。目的「コロナ禍での逢坂小学校の頑張りを伝える」、相手「地域の人」、取材方法「必ずアンケート調査を取り入れる」という3つの条件の中で、2チームが新聞作りに挑むという形での学習は、児童同士の話し合いや協力、チーム同士での刺激など、良い関わり合いが生まれ、児童は最後まで主体的に活動していた。完成した新聞をチーム同士で読み合ったり、他校の友達や地域の人に内容や頑張りを伝え評価してもらったりする中で、この単元で身に付けた「新聞作りの技」を再確認することができ、書くことに対する自信や意欲が高まったようである。

〈高学年（5年）「新聞づくりを中心とした、情報発信力の育成」〉

〈目標〉 新聞づくりを中心にして、さまざまな手段で情報を発信する力を身につけることができる。

〈実践〉

①新聞づくり（国語科、社会科、道徳）

- ・児童一人一人が、自分たちの発行する新聞のタイトルを決めて、各教科の学習のまとめを新聞にして発行した。
- ・国語科では、友達へのインタビューをまとめて、友達紹介の新聞を作った。
- ・社会科では、米づくり、野菜づくりの工夫を新聞にまとめてみた。
- ・国語科と道徳を関連させて、ユニバーサルデザインについて調べたことや自分の考えを新聞にして伝えた。

②学校ホームページでの発信（国語科、総合的な学習の時間）

- ・国語科の「よりよい学校生活のために」の学習では、総合的な学習の時間で取り組んでいた「逢坂の素敵を再発見しよう」という取り組みと関連させて、「よりよい逢坂にするために」という議題を設け、保護者にも加わっていただいて会議を開いた。そこで話し合われた内容や、よりよくするためにこれから取り組もうとしていることについて、報告文書を作って学校のホームページに掲載した。その際には、見出しや載せる記事の内容、写真など、新聞づくりで学習してきたことが生かされた。

③プレゼンテーションでの発信（総合的な学習の時間）

- ・前述の「逢坂の素敵を再発見しよう」の続きの学習である「逢坂の素敵をアピールしよう」では、今



年の取り組みのまとめとして、自分たちが見つけた地域の良さや課題、自分たちの取り組んできたこと、課題解決に向けた提案や地域の人たちへ伝えたい思いをプレゼンテーションにまとめて発信した。

- 最初の新聞づくりの際に、インタビューの仕方や新聞へのまとめ方について学習したことや国語科の「新聞を読もう」の学習の中で、新聞のつくりや伝え方の工夫を学習したことが、新聞づくりだけでなく、その他の表現方法による発信の際にも生かすことができた。回を重ねるたびに、インタビューなどの取材にも慣れ、聞く内容を絞ったり、伝えたいことがよく分かるように、写真やグラフの資料の選択を工夫したりした結果、内容が充実してきた。



(2)「全校共通部」での実践 (NIEタイムの実践)

〈下学年〉

「4コマ漫画を完成させよう」

- ・ 4コマ漫画を1コマずつばらばらにしたものを児童に提示し、もとの4コマになるように並び替える。並べ替えたものを紹介し合い、なぜその順番にしたのか根拠を発表する活動。

「見出しで五・七・五」

- ・ 見出しから五・七・五になる言葉を切り抜いて、オリジナル川柳を作る活動。

- 1年生は新聞の4コマ漫画の絵(場面)や吹き出しの言葉に着目しながら、自分の考えを友達に紹介した。2、3年生は、見出しの中から五・七・五になるものを探し、自分たちなりの川柳を作っていた。見出しを読む活動を通して、記事全体のおおまかな内容を把握し、中には記事の内容を隅々まで読む児童もいた。どちらの活動も子どもたちにとって、とても興味のある学習であった。



〈上学年〉

「新聞の1面コラムを読もう」

- ・ 短い文章を読んで、自分の意見をまとめたり言葉を広げたりする活動。
(視写、辞書を使った言葉調べ、コラムに対する意見文)
- 児童にとって身近な、地域の記事やアニメ、ゲームの記事などを中心に扱った。辞書を使った言葉調べの際は、コラムの中に出てきた言葉から競うようにどんどん言葉を広げ、友達と調べた言葉を共有している姿が見られた。

〈特別支援学級〉

「『の』を探せ!」

- ・ 新聞の小さい文字に慣れる活動

「同じ内容の記事を探せ!」

- ・ 新聞を数誌読み比べて、同じ内容の記事を探し、切り抜く活動。

・内容の読み聞かせをし、感想を伝え合う活動。

- 特別支援学級の児童にとって新聞は字が小さく情報量が多いため、注目するポイントが分からず苦手意識を持っていた。しかし、紙面の写真や学習した漢字など、児童が着目しやすくなじみのあることを活動の中に取り入れることで、新聞に対する抵抗感が減り、校内に掲示してある新聞に興味を持ったり、他学年がNIEタイムでしている取り組みについて尋ねたりする姿が生まれた。

〈その他全校共通の取り組み〉

「新聞コラムを読もう」

- ・毎週金曜日の朝の時間に、子ども新聞のコラムを読み、コラムにタイトルをつける。

〈児童会活動〉

「新聞紹介コーナー」(わくわく委員会)

- ・毎週月曜日のお昼の放送で、委員会の児童が選んだ新聞記事の概要を放送する。
- ・放送で取り上げられた記事については、図書室前に掲示し、誰でも見ることができるようにする。

「新聞パズル」(いきいき委員会)

- ・新聞記事を切り抜き、もとの形にしていくゲーム(読書集会で実施)

(3)「環境整備部」の取り組み

〈新聞コーナーの設置〉

①上学年コーナー

- ・新聞5紙は、3階の廊下の観察台の上に、新聞社ごとに並べた。同じ日の1面が見られるように並べてあるので、トップ記事の違いに気付くことができた。

②下学年コーナー

- ・子ども新聞は下学年の教室が近い図書館前に掲示を、毎朝担当委員会の児童が行った。連載のお話や4コマ漫画を毎朝読む児童が増えた。1カ月の新聞をその下の棚に置き、いつでも閲覧出来るようにしている。下学年のNIEタイムに活用しやすくした。

③今日の新聞ニュース

- ・図書館入口の掲示板に大きな今日のニュースは新聞ごとに切り取って貼った。同じ記事でも書き方に違いがあることに気付くことができた。また近くに、新聞のレイアウトの仕方について解説したものが貼ってあり、各社の記事の書き方の工夫に気付き、自分が新聞を書くときの参考にできた。

④今日の記事に関連ある10年前の新聞掲示

- ・大きな災害が発生した時の新聞は通常とは大きく異なった記事の書き方がしてあり、保存してある10年前の記事を、当日特集を組んで掲示することにより、当時の災害の様子を読み取ることができた。



〈委員会活動〉

①古紙、記事の利用

- ・読書月間の集会やミニイベントでは、図書委員会が工夫して

企画し、図書館に保管してある新聞紙で、身近な内容の記事をパズルにして活用した。古い新聞紙は、工作にも利用してリースやツリーを作るなどして、古紙が身近な材料となった。



②新聞コラムの活用

- ・学校司書が、各紙のコラムをストラップした冊子を作成しており、その日の委員会の当番の児童が、コラムのタイトルを書いて付箋に貼り、図書館前の新聞コーナーに設置した。その冊子を参考に、朝の読書の時間「新聞コラム」タイムの日を設定し、全校で取り組んだ。持ち帰り、自主学習や親子読書に活用する児童が増えた。

〈学級のN I Eコーナー〉

①N I Eタイム（基礎学力定着の時間「がんばりタイム」、毎週火曜日）

- ・新聞記事を使った取り組みを行い、そのワークシートを各教室に掲示した。

②家でスクラップ

- ・夏休み中の心に残った新聞記事を家で切り取って、ワークシートに貼ってきた。学級で一言感想を書いて伝えあった。図書館前にも掲示して、夏休み作品展中に読み合うことができた。友達と同じ記事を選んでいたり、読んだことのある記事を見つけたりして話が盛り上がった。

3 成果と課題

(1) 成果

- ・普段目にしていない新聞を学習に活用することで、意欲を持って学習に取り組むことができた。
- ・新聞作りの学習に本物の新聞を教材として活用することで、読み手を意識した具体的な工夫を学ぶことができた。
- ・インタビューやアンケートなど、新聞をつくるための取材の仕方や紙面の構成を工夫して新聞作りをすることが、ホームページやプレゼンテーション作りにも生かすことができ、多様な方法による発信を体験することができた。
- ・毎週火曜日10分間はN I Eタイムと決めたことで、全校で新聞に親しむ時間をとることができた。また、N I Eコーナーを設け、可視化することで新聞活用への意識の向上につながった。
- ・各学級の児童の実態や興味、学校行事、社会の流れなどに合った記事やコラムを選ぶことができた。
- ・図書館を中心に、目の触れるところに新聞が掲示してあり、休憩時間等立ち止まって記事を読む姿が上学年はもとより、下学年にも広がっていった。
- ・図書館資料として保管し、調べ学習のツールの一つとして活用することが増えた。
- ・パズルや工作などで、楽しみながら活用することもできた。

(2) 課題

- ・本物の新聞を教材として使う際に、記事の内容等に留意する必要がある。児童の発達段階や記事の内容等を吟味する時間を設定していく必要がある。
- ・他学年の実践との交流時間が取れず、実践の幅が広がらなかった。

- ・10分間という時間の短さから、活動が途中で終わってしまうことがあった。また、活動の後の意見交流が時間の都合上できなかつたり、週をまたいでしまったりすることが多かった。
- ・学年間や児童の理解の状況などを系統立てたがんばりタイムの運用ができなかった。
- ・新聞の絵や写真にはひきつけられるが、読むことには個人差があるため、記事を読むことができない児童も見られた。
- ・保管の仕方が難しく、利用したい資料を探すのに時間がかかった。

4 おわりに

本年度のNIE活動の実践を通して、児童は「進んで学習に取り組む力」「情報収集し、知識を獲得する力」「発信する力」を高める活動を行うには、新聞の活動が有効であることが言える。今後も、新聞を持続的に活用した実践を、発達段階に応じながら組織的に取り組んでいくことで、新聞が備えている社会性、多面的な見方に触れる機会を大切にしていきたい。

新聞活用による「探究基礎」と各教科の実践 (NIE実践報告2年次)

青翔開智中学校・高等学校
司書 横井 麻衣子

1 はじめに

平成31年度(令和元年度)よりNIE実践指定校となった。本校の取り組むテーマは『新聞を活用することで、学校図書館の校内情報ハブとしての機能を向上させ、本校の総合的な学習の時間「探究基礎」と各教科の連携を深める。』である。2年目は新型コロナウイルス感染症拡大に伴う全国一斉休校など学校生活がままならない状態でスタートし、思うように進まないことも多かったが、授業内外でNIEを実践した。

2 本校の状況

本校は鳥取市内唯一の中高一貫校であり、生徒全員が一人1台iPadを持ち学習に活用している。また、校舎全域で無線LAN(Wi-Fi)を利用することができる。さらに、NIEで日々届く新聞のほか、「朝日けんさくくん(朝日新聞)」と「ヨミダスforスクール(読売新聞)」「日本海新聞記事検索サービス」の3種類の新聞記事検索データベースを利用することができる。朝日・読売のデータベースは同時接続50台までで、1学年の生徒が同時に利用することができる。

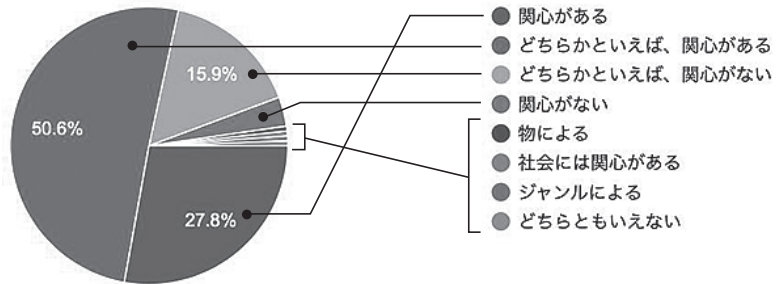
NIEの実践にあたり、新聞やニュースに関する本校の生徒の実態を2回調査した。調査の有効回答は、2019年度は240件、2020年度は176件であった。次ページに示しているのは2020年度の結果である。

地域や社会で起こっている問題やできごとに「関心がある」と答えた生徒は2019年度調査では27.9%、2020年度調査では27.8%。「どちらかといえば関心がある」と答えた生徒は2019年度調査では50.8%、2020年度調査では50.8%。全体としては8割の生徒が世の中に起こっていることに関心を持っている。残念ながら2年間のNIE実践により関心度が高まったとは言えない。一方、紙の新聞を読むかという質問に対しては「ほぼ毎日読んでいる」と答えた生徒が10.8%から7.4%へ、「週に2~3回読んでいる」と答えた生徒が16.3%から13.1%へ、下降し、「ほとんど、または全く読まない」と答えた生徒は55.8%から58.5%へわずかに増加している。彼らがどのような手段でニュース情報を読んだり見聞きしたりしているのかという質問については、インターネットのニュースが大半を占めると予想していたが、依然として79.0%が「テレビ」を選択しているほか、48.9%の生徒がインターネットの中でもブログやSNSといったコミュニケーションツールを情報源として活用しており、情報リテラシー教育、メディアリテラシー教育の必要性を感じる結果となっている。

①あなたは、地域や社会で起こっている問題やできごとに関心がありますか。

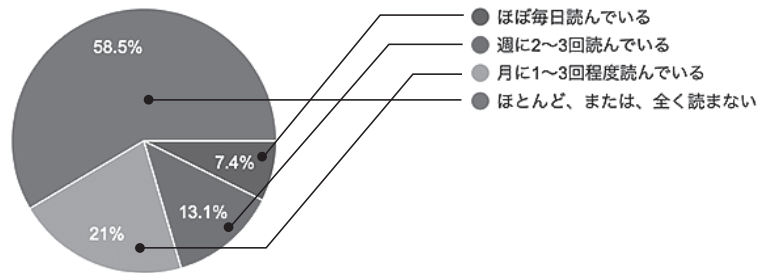


176件の回答



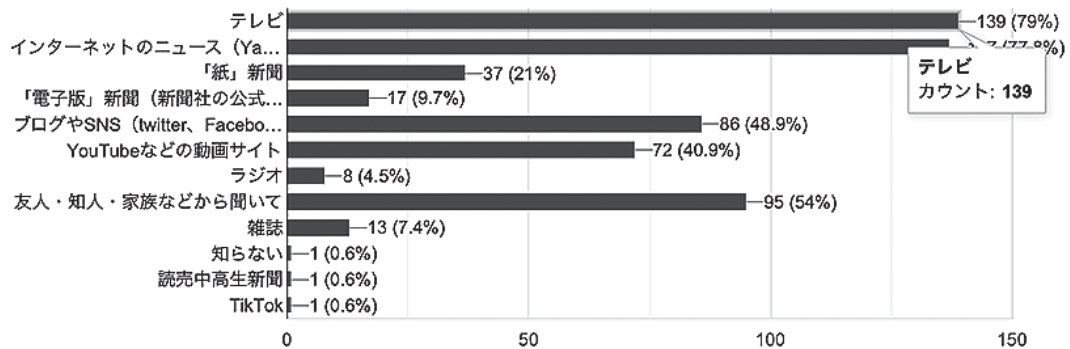
②あなたは普段、「紙」の新聞を読みますか。

176件の回答



③あなたは普段どのような手段でニュース情報を読んだり見聞きしたりしていますか。
(複数回答可)

176件の回答



3 授業外の実践

3-1. 校内NIEコーナー・掲示コーナーの設置

毎日届く新聞は本年度も引き続きラーニングセンターに設置した。ラーニングセンターは本校の図書館機能の中核であり、多くの図書館資料がそろっているほか、校舎中央に位置しており、すべての教室からアクセスしやすい場所である。本の貸出カウンターも近いことから記事に関連する書籍の展示も同時に行った。

クラブ活動、読書活動など自校の生徒の活動成果が新聞記事になった際は関心度も高く、生徒同士で記事を読みながら話をする姿も多々みられた。



3-2. 朝新聞の取り組み

本校は毎朝、登校直後・朝のホームルーム前の8:30～8:40の時間を「朝読書」の時間として、全校で読書に取り組んでいる。昨年度に引き続きNIEの取り組みとして、毎週金曜日を「朝新聞」の日とし、中学校3年生から高校2年生までの3学年で新聞を読んだ。「朝新聞」は社会科教員主導で進路委員会協力のもと行った。

手順としては、毎週金曜の朝、実施学年の進路委員の生徒がクラスの人数分の新聞を教室に持ち込み、クラスメートの机に配布する。生徒は配られた新聞の中から10分間で2～3記事を目安として関心を持った記事を読んでいく。中学校3年生は記事を切り抜きノートに貼っておき、翌週は記事の要約や感想をノートに記録する。高校1年生はiPadに「新聞記事フォルダ」を作り、関心を持った記事を撮影して画像として保存し貯めていく。

月に1回程度、「新聞シェア」の日を設け、自分の選んだ記事の要約や感想・意見を隣の席の生徒に伝える。紹介された生徒は質問や感想を述べ、交代して同様に行う。1カ月間で読みためた記事の中からこれだと思うものを紹介し、記事を通して交流とディスカッションを行った。



▲毎週金曜の「朝新聞」を社会科・進路委員会の協力を得て実施



▲高校1～2年生は記事を撮影しiPadに保存



▲中学校3年生は切り抜きをノートに貼り、翌週は要約や感想を記録



▶毎月クラスメートと新聞記事を通して交流



3-3. Google Classroom の取り組み

本校ではGoogle社が提供する教育機関向けクラウドパッケージG Suite for Education（2021年2月17日より「Google Workspace for Education」に名称変更）を開校時より導入している。G Suiteに含まれる機能のひとつに「Google Classroom」というものがある。オンライン上に教師が授業の「クラス」を作り、登録した生徒とコミュニケーションができる機能で、課題の作成・配布・添削・進捗（しんちよく）確認などを効率的に管理するものである。本年度、コロナ禍の影響で一時はオンライン授業を展開することになり、Zoomなどのビデオ会議システムを利用した双方向の授業のほか、Google Classroomを利用したオンラインでの課題配信・回収のやりとりが急速に進んだ。各教科の授業クラスとは別に、本や読書に関する情報発信を行う「図書館ルーム」を作り運用した。図書館ルームでは、新聞記事の紹介も行い、今話題になっているニュースなどを取り上げた。年度末の「図書館満足度アンケート」で「図書館ルーム」の利用状況や要望を聞いたところ、有効回答181人中の123人が参加登録しており、要望として「もっと本の紹介をしてほしい」25件を「もっとニュース・時事ネタを提供してほしい」26件が上回る結果となった。



▲教科やホームルームのオンラインクラスが並び Google Classroom の一覧画面

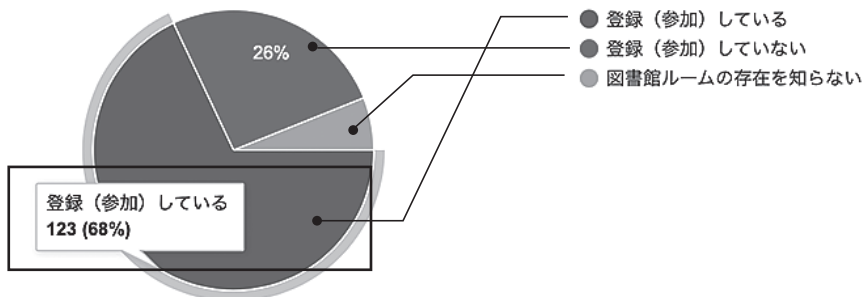


▲図書館ルームの投稿例 (地域ニュースや新聞記事を紹介)

Google classroomの図書館ルームについて

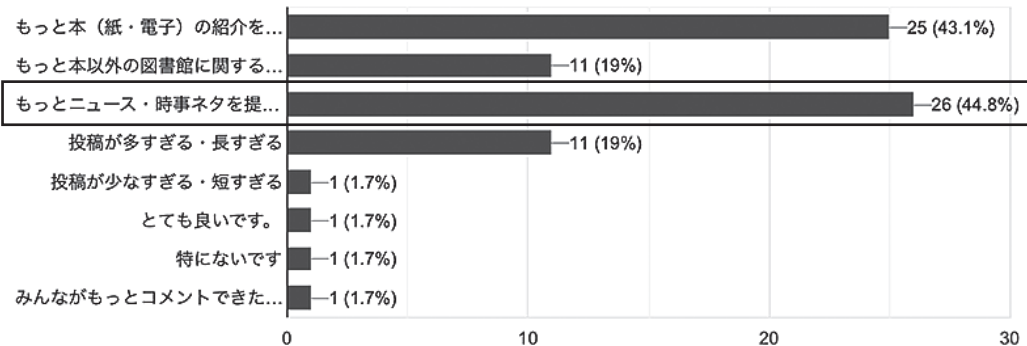
Google Classroom内の図書館ルーム (Bookworm's room) の利用状況を教えてください。

181 件の回答



クラスルームに関して要望があればお知らせください

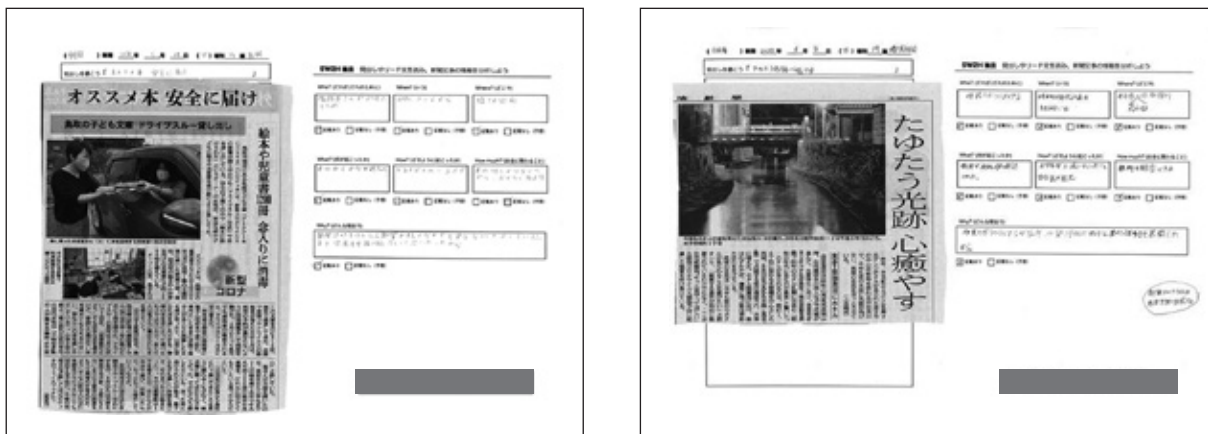
58 件の回答



4 授業における実践

●中学校1年生 探究基礎 I (総合的な学習の時間)

毎年行っている新聞社による出前講座を本年度は感染症対策のためオンラインで行った。朝日新聞社鳥取総局の角谷陽子氏を講師としてオンラインビデオ会議システムを使った講義と質疑応答を行い、メディアの比較や新聞の紙面構成などについて学んだあと、1人1記事を選んでワークシートを使った5W2H分析を行った。



●中学校3年生 現代文「メディアリテラシー ～新聞記事を読み、比べよう～」

発信者によって伝える情報の選択や情報の伝えかた・伝わりかたに違いが出ることを意識させ、2つの新聞の読み比べを行った。授業の流れは下の通り。

①グループ分け

Aグループ：朝日／日本海2020年10月2日（金）1面

Bグループ：朝日／読売2020年10月4日（日）1面

Cグループ：読売／日経2020年9月17日（木）「菅内閣発足」

Dグループ：朝日／日経2020年10月1日（木）「トランプ・バイデン討論」

②2つの新聞記事を読み比べる

見出し、小見出し、リード文、図、写真、キャプション、本文などの着目すべき点を伝え、新聞社の価値判断の違いを考えさせる。

③思考ツール「ベン図」を使って情報を整理する

模造紙に比較する対象となる2紙の円を書き、付箋やカラーペンを使って記事の内容を整理する。

④2つの新聞の共通点・相違点をまとめ発表と共有を行う

他のグループの発表を聞き新たに気付いたこと、分かったことを文章で表現する。



▲グループで2紙の1面や記事を読み比較する



◀共通点や相違点を分析したベン図

5 本年度の総括

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンラインを使った取り組みがさらに進んだ1年となった。来校者の制限などが続く中でもオンラインビデオ会議システムを使った講師の招聘や Google Classroom を活用した新聞記事の共有など新たな実践ができた一方、授業における活用事例はわずかにとどまった。

本校では校務や教育活動のペーパーレス化と情報検索能力の育成を図るため、オンラインデータベースの活用を推進している。文部科学省のGIGAスクール構想が前倒しとなり、2021年度から全国の小中学校で1人1台のタブレット端末と小中高に高速大容量の通信ネットワーク環境が整備されることとなった。NIE実践においては、これまで全国的に紙の新聞の実践が主流であったが、今後は新聞記事データベースを活用した取り組みが普及することが予測される。実践指定校へのさらなる支援として、データベース導入に関わる支援をと期待している。

生徒の思考力・判断力・表現力などを高める探究的な学びの中で、良質な情報として新聞は欠かせない。NIE実践校の指定期間は終了となるが、次年度以降も新聞を活用した取り組みを継続していきたい。

NIE実践報告書

鳥取県立八頭高等学校 下谷 慎一

1 はじめに

八頭高校は全日制普通科、2・3年生7クラス、1年生6クラスで3学年合わせると20クラス、約800人の生徒が在籍している。総合コース、探究コース、体育コースの3つのコースに分かれている。令和2年度入学生より単位制高校としてコース制から類型制への変更が行われ、2年次より探究、総合、看護・医療、体育の4つの類型を選択することとなる。

生徒の進路状況は4年制大学への進学者が約5～6割、短大が1割、専門学校が1～2割、就職者は5%程度となっており、進学する生徒が9割以上を占めている。近年のICT化の進行により情報が氾濫する中、新聞というメディアを活用して社会とのつながりを意識し、主体的な学習者となるためのきっかけづくりとして、NIEの活動を行ってきた。また、受験指導についても新聞の活用が大いに役立つものとする。

本校でのNIEの取り組みは地歴・公民科の教員を中心に実施してきた。1年生で実施する現代社会の授業、2年生探究コースで実施する探究ゼミ、3年生の進路指導での活用を主な取り組みの場とした。

2 実践の概要

実践の具体的な内容は次のとおりである。

①新聞閲覧コーナーの設置

生徒自習室の前に新聞閲覧コーナーを設置し、NIEで提供していただいた新聞を自由に閲覧できるようにした。生徒自習室には大学入試の過去問集や大学案内などが設置してあり、多くの3年生が学習に利用している。近年、大学入試が多様化しており、学校推薦型・総合型選抜(旧AO)入試を受験する生徒が年々増加している。そのような入試においては小論文試験や面接試験が実施される場合がほとんどである。そこで問われる内容は受験する学部学科の内容に関して社会で問題とされていることが多い。開始時期の早い総合型入試は、早いところでは8月ごろには始まる。日常的に社会の出来事に触れ、そして自分なりの問いを立て、思考し、意見を形成し、それをアウトプットするトレーニングをしていかなければならない。そのためにはまず、知識を得ておくことが必要となる。そこで、新聞を開き、社会の出来事に触れながら思考することができるようにしようというのが閲覧コーナー設置の目的である。また、国公立大学の一般入試においても小論文や面接を実施する大学が増加している。特に後期試験では実施割合が高く、多くの3年生が新聞を活用しながら学習した。



NIE新聞閲覧コーナー

②小論文・面接指導における活用

近年の小論文試験では課題文型の出題が多く、問いを2つ以上に分けてある場合が多い。その典型的な出題方法は「課題文の要約」と「意見論述」の2つの問いである。意見論述の際には「具体例を述べながら」というような条件を付される場合も少なくない。したがって、

課題文を読んで理解し、思考し、意見を形成し、表現していく力が求められる。さらに問われている内容と同じ構造を持った社会事象を具体例として使うことによって説得力を高める必要がある。今年も初期指導に新聞記事や社説を多く活用した。具体的には、新聞記事や社説の内容を要約、それについて自身の考えを述べるという演習だ。それぞれの生徒が受験する学部学科の内容に関連した記事や社説を題材にして要約と意見論述を繰り返す。記事や社説は字数があまり多くない上に明確に意見が書かれているので小論文のトレーニングに使用するにはとても優れている。また、実際の入試でも社説が課題文として出題されている場合がよくみられる。私が添削指導を担当した生徒が受験した山口大学や福知山公立大学など、日本経済新聞や朝日新聞、読売新聞などの記事が課題文に使われていた。

また、面接指導においても新聞を活用する場面は非常に多い。右の写真は二次試験に面接のみが課されている国公立大学を受験した生徒のノートである。受験する学部に関連する内容の新聞記事をノートに貼り、記事の内容を要約し、それについての意見を述べるというものだ。大学入学共通テスト終了後、約1カ月間取り組んだ。面接では受験生の志望理由や熱意を見られる。本当に関心が高く、熱意があるのなら当然にある程度の知見を得ていると考えられ評価される。このようにして自身が学ぼうとする分野に関する知識を得、課題について思考し、意見を言葉で表現しておくことは、面接試験に向かうためにとても有益である。



生徒が作った新聞記事ノート

本校では朝日新聞社の「朝日けんさくくん」や読売新聞社の「ヨミダス」を契約しており、特定のキーワードで関連記事を引いてくることができるこれらのサービスを頻繁に活用した。また、切抜き速報という雑誌も4分野、図書館で購入してもらい活用している。

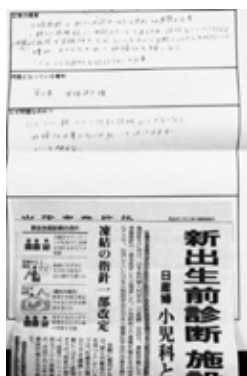
③探究ゼミにおける活用

本校では2年次より探究コースが2クラス設置される。探究理科・探究文科各1クラスである。探究コース生は1年間、16のグループに分かれてそれぞれが設定したテーマについて研究していく。地歴・公民に関するグループは3グループあり、そのうち、私が担当したグループの生徒たちは「若年層の人口流出を食い止めるために」というテーマで探究活動を行った。また、活動を拡大して、鳥取県の委託事業であるとっとり若者広聴レンジャーにも参加した。定住促進やI J Uターン促進する地方自治や各団体の取り組み例などを調査する際に新聞記事を活用した。生徒たちが考えたプランは鳥取県への提案として報告した。

④現代社会の授業における活用

憲法の人権規定と新しい人権に関する発展学習として新聞を活用した授業を実施した。人権問題が含まれていると思われる記事を探し、記事の要約、どのような人権のどのような問題なのか、それについて自分はどう思うのかということワークシートにまとめる。4人程度の小グループに分かれ、グループ内で相互に発表し、全員が質問を投げかける。代表を選び、クラス全員に向けて発表し、その内容を共有する。憲法の人権規定の私人間効力については学習しているが、生徒の感性で人権問題が含まれていると考えたものでよいということにした。また、国内法は国外には適用できないが、そこも特に問題とせず、生徒の感性を重

視することとした。最初はどのような記事を選べばよいのか戸惑っている生徒も少なくなかったが、そのような生徒一人一人からの質問を受け付け、持ってきた記事について人権にかかわる問題はないだろうかと一緒に考えることで、社会で起こっている出来事を見る新しい視点に気づいた者もあったようだ。下の写真は生徒が作ったワークシートだが、出生前診断に関する記事については幸福追求権（13条）、コロナ禍での生活困窮者についての記事では生存権（25条）の問題であると考え意見を述べていた。この他にも黒人差別と闘うスポーツ選手の記事では、法の下での平等（14条）や表現の自由（21条）の問題と捉えていた。また、香港における言論統制などの問題を表現の自由（21条）や請願権（15条）に関連した問題として取り上げた生徒も多かった。このように、厳密に言えばそこに挙げた権利が直接適用できるわけではないのだが、記事の内容を読み、よく考えて問題点を明らかにしていこうとする姿勢が見られた。また、記事の中から問題となっている人権を引き出す際、こちらが思いもよらなかった人権問題を主張し、優れたセンスを発揮する生徒もいた。授業で学習する内容が、実際の社会と密接に関連しており、自身にもかかわる内容なのだと認識することができたようだ。



生徒が作ったワークシート



新聞記事を選んでいる様子

⑤図書館における取り組み

図書館と地歴・公民科の先生方において「第11回いっしょに読もう！新聞コンクール（日本新聞協会主催）」に取り組んでいただいた。地歴・公民科の授業でコンクールについて説明し、夏休みの自由課題として積極的な参加を促した。提出された作品を図書館が集約し、コンクールに応募した。奨励賞を受賞した生徒は新型コロナウイルス感染症が拡大する中における学生の貧困問題と大学での学食割引による支援の記事について意見を述べた。社会の課題について知り、考え、意見を形成し、表現するという活動が含まれており、さまざまな学びの基礎となる活動といえる。来年度に向けても継続して取り組んでいきたい。

⑥その他

新聞への投稿を促す取り組みも行った。1年生に「新聞に自分の意見を投稿しよう！」といういくつかの新聞社の投稿先のメールアドレスを印刷し、投稿記事の例を載せた案内文書を配布して投稿を促したが、なかなか自発的な投稿にはつながらなかった。本年度入学生より、「総合的な探究の時間」が本格実施となっており、地域課題について考えたり意見を述べたりする機会が増えている。今後も取り組みを継続し、自発的に意見を発信していく生徒を育てていきたい。

3 成果と課題

近年はICTの活用が進む中で紙の媒体である新聞が生徒たちの生活の中で影が薄くなってしまっている。インターネットにあふれた情報の中から自身の好む情報のみを取り出して活用しようとする傾向が強い。限られた新聞紙面の中の情報から何かを得ようとするのではなく、自分の好む情報や自分に近い意見にばかり歩み寄ろうとする傾向が強い。自分の価値観やフィルターを通して社会を見るだけでは社会に横たわる課題は見つけられず、それを解決していく力も身につかない。新聞には社会で問題とされている内容が自分とは異なる視点で選ばれ、掲載されている。そこには社会を代弁していたり、偏った意見も存在している。決して自分にとって心地いいものではないものも多いはずだ。しかし、そのようなものに触れながら社会性を身に着けたり、思考力や課題解決力を高めていくことができるのだと考える。NIEの活動を通じて新聞などを読むことによって、今まで知らなかった世界に触れる機会となったことと思う。本校においては地歴・公民科の教員が中心となり実施したが、他教科の先生方も含めた、学校としての体系的な活動をしていくことが必要だ。

岩美高等学校NIEの取組

鳥取県立岩美高等学校

栗原 由紀子

1 はじめに

本校は鳥取県の東の端、岩美郡岩美町にある県立高校として、地域の方々からたくさんの支援や応援を受けている。生徒数は、約180人で、全日制普通科高校である。1年生では全員が共通のカリキュラムで学び、2年生からは「進学類型」「観光・スポーツ類型」「福祉類型」の3つの類型に分かれて学習している。進路先は、大学や短大、専門学校への進学、県内外への企業への就職など多岐にわたる。

本校がNIEに取り組んだ理由は2つある。

一つ目は、自分と社会および学びと社会とのつながりを生徒に実感させ、思考を能動的に深めるためである。一昨年度1年生現代社会の授業において、あらかじめ新聞を読ませ、気になった記事や自分が興味関心のある記事を切り取り、疑問を感じたり知りたいと思ったりした箇所に線を引かせ、調べさせた。その結果などについて毎時間、授業中に発表させ、その内容などについてクラスの仲間と意見交換し、考えを共有させた。アンケート結果によると、86人中56人（約70%）の生徒が新聞発表した方が、中学時代よりも社会問題に対する興味関心が深まった」と回答した。（多くの生徒が中学時代新聞発表などを未体験）

新聞は、自分と社会をつなぐ窓口になる。新聞を読むことにより、生徒は「授業で学習する内容は社会で役に立つのだ」「自分と社会とのかかわり」を感じていく。本校では、生徒が自らのキャリアについて主体的に考えるよう支援しているため、新聞を通してさまざまな人の生きざまに出合うことで、時機を捉えた指導も可能になる。社会には多様な見方・考え方があることを知り、今までとは違った視点から物事を見ることで、自分の考えやあり方を深めるヒントが新聞にはあると考える。

二つ目は、ふるさとへの誇りを醸成するとともに、愛校心を育むためである。本校生徒のうち、地元の岩美中学校から進学する生徒は全体の4分の1程度となっており、鳥取市内を中心としたさまざまな地域出身の生徒が本校に集っている。本校は、地域探究型学習などを中心に、地域と連携した学校づくりを推進している。岩美町に関連した新聞記事を授業で取り扱うことで、自分の学んでいる地域のことを知ったり、新たな価値を見出したりして、自分たちの暮らすふるさとへの誇りを醸成したい。また、本校生徒が活躍した新聞記事を校内に貼付することを通して、頑張る仲間を応援し、愛校心を育みたいとも考えている。

このように、新聞の活用は、情報があふれ、安易に情報に流されやすい現代の子どもたちにとって、情報にじっくりと向き合い、主体的に読み解く力をつけるとともに、地域社会とのつながりの中で自分の在り方や将来などについて考察するなど、さまざまな学習効果が期待できる。本校でもNIEを導入し、主体的、対話的で深い学びを推進していきたいと考えている。

2 実践の概要

新聞を活用した取組は、次の通りである。

- (1) 岩美町について深く知ることができる記事や岩美高生の活躍ぶりを載せる掲示板的確保
(職員玄関前と生徒玄関前)



▲生徒玄関前に置かれた岩美町、岩美高生関連の記事

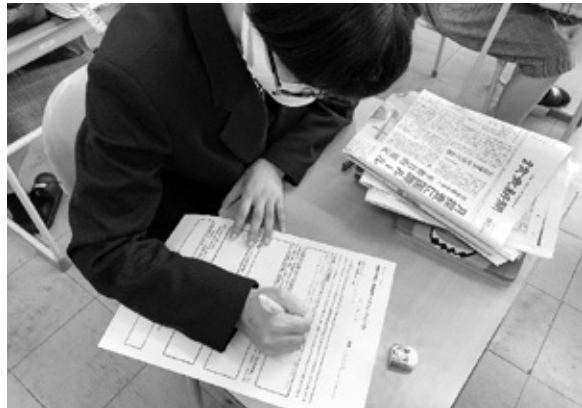
(2) 現代社会の授業での新聞発表

現代社会の授業では、毎時間、事前に生徒に興味・関心のある記事を選ばせ、その記事を要約し、わからない語句などを調べ、感想を書いて授業の始めに発表させている。この中で、生徒はクラスメートの発表を聞いて、自分の意見を考え、意見交換し、多面的、多角的な視野を持つことができるようになりつつある。

(3) 新聞週間を活用した取組

日本新聞協会は、10月15日から同21日までを「新聞週間」と定めている。本校でも、新聞週間に合わせて、現代社会の授業で生徒に新聞を配布し、じっくりと新聞を読む機会を作った。そして、気になった記事を選び出し、要約した上で、感想などについて、クラスメートたちとの意見交換を行った。

▼新聞週間、意見交換をしている様子

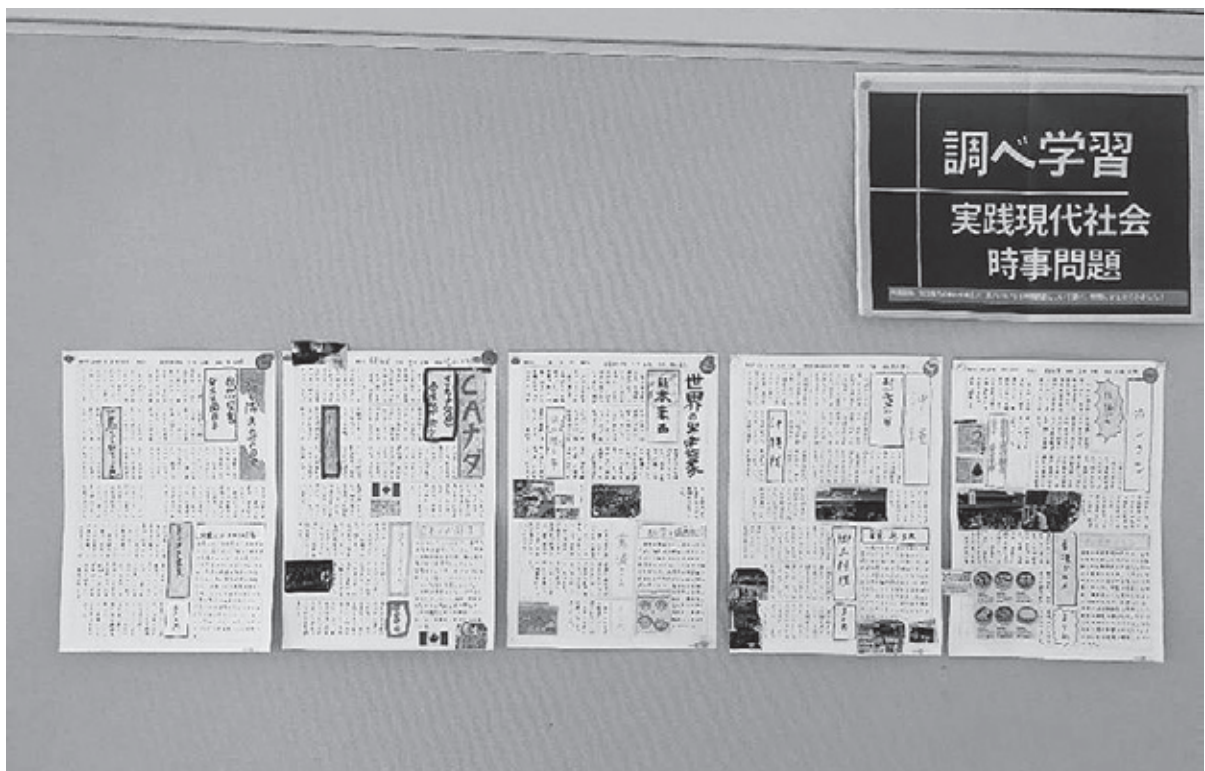


(4) 学校設定科目「時事問題」を通した取組

3年生の選択科目「時事問題」の授業では、岩美町の観光について書かれた記事から、生徒が地域社会が抱える課題を見つけ出し、解決策を考え、実際に行動に移すことに取り組んだ。生徒は、5月に緊急事態宣言が解除されて以降、新型コロナウイルスの影響で岩井温泉への観光客が激減し、観光業関連の経営が苦しいという新聞記事を読んだ。そこで、高校生が力になれるのか、自分たちにできることはないかという視点で解決策を考えた。その中で、SNSを使って岩美町の良さを発信していこうというプロジェクトを実行し、YouTube動画を作成した。また、今までの取り組みについてモニターツアーの参加者の方にプレゼンテーションした上で、高校生が岩美町の観光業を盛り上げるためにどのようなことが必要かについて助言をいただいた。

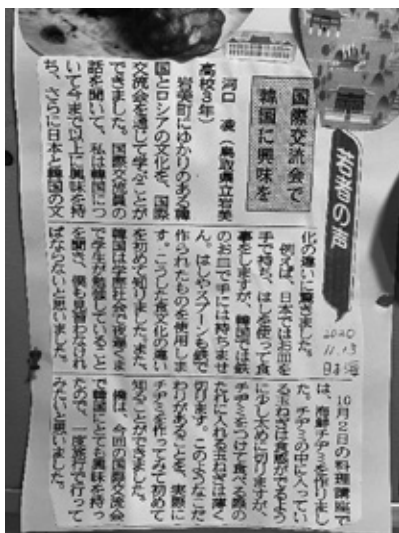


次に、国際平和や環境問題について、自ら調べたことを新聞にまとめて発表した。新聞づくりには苦戦していた生徒たちであったが、調べたことを整理してまとめるという活動に積極的に取り組んでいた。



(5) 学校設定科目「実践現代社会」で新聞投稿

令和2年度の「実践現代社会」の授業では、国際交流員の協力を得ながら岩美町にゆかりのある韓国とロシアに関わる国際交流会を2回シリーズで行った。1回目は、韓国、ロシアの文化、教育、歴史などについて学習したのちに開催し、2回目では、岩美町産のイカ、エビを使った各国の料理を作り、それぞれの国について理解を深めた。国際交流会で感じたことや学んだことを、多くの人に知ってもらうために日本海新聞の「若者の声」に投稿した。



(6) 学校新聞の作成

1年生3人と2年生の生徒で、岩美高校新聞を作成。取材の仕方や、記事の書き方などを学習し、学校や地域に関する情報を発信した。生徒は、新聞作成を通して、地域の人と関わることができ、良い経験をする事ができた。



(7) 図書館との連携

毎日届く新聞は、図書館に新聞閲覧コーナーを設置して、生徒が自由に閲覧できるようにしたことで、新聞の1面の読み比べをすることができた。



▲図書室に置かれた新聞

4 成果と課題

(1) 成果

1年生の現代社会の授業の中で、新聞の読み方などを話しているうちに、生徒は徐々に新聞の書かれている内容に興味・関心を持ち始めた。生徒アンケートの結果については次の通りである。

- ・ 中学時代より地域社会の問題に興味・関心を持つことができた生徒…87%
- ・ 現代社会の授業の中で新聞を読むことにより、社会問題を理解することができた生徒…94%
- ・ 新聞発表を行うことで、多面的・多角的な視点を持つことができた…91%
- ・ 新聞週間で、新聞の読み方について講義した結果、新聞の読み方が分かるようになった…96%

以下は、生徒からの感想の一部を載せたものである。

【生徒の感想】

- ・ もともと新聞を読むことは好きでしたが、触れる機会があまりなかったので、今回授業でじっくり読むことができて楽しかった。また、いろいろな記事に対する私の意見と周囲の意見の違いや、相手の意見が聞けてすごく楽しかった。
- ・ この授業をきっかけに、新聞を読むのが楽しくなってきた。毎日読みたいと思った。
- ・ 新聞の読み方や新聞1面の記事の中の構成など、授業を通して知ることができました。新聞週間という期間にたくさんの新しいことが学べたと思います。いい経験ができました。
- ・ この授業を振り返ってみると、新聞を読む楽しさを学べました。これから新聞を読みたいと思います。
- ・ この授業を振り返ってみると、新聞を読む楽しさを学べました。これから新聞を読みたいと思います。
- ・ 授業を通じて新聞の読み方を知り、もっと読みたいとなった。今現在世界がどうなっているか知りたくなってきた。
- ・ 今まで新聞とか読んだことなかったけど、読んでみたら結構分かりやすいなと思いました。
- ・ 今まで新聞を読んでこなかったけど、興味深い記事がたくさんあると気づき、これからは一通りの記事に目を通していこうと思いました。
- ・ 新聞を読むと、いろいろなことが詳しく書いてあってとても勉強になると、改めて感じました。
- ・ 一つの記事からいろんなことが連想できました。新聞の面白さが分かりました

- ・新聞を普段読まないなので、この取り組みを通してインターネットだけでなく新聞も読めば、役に立つと思いました。
- ・相手の発表を聞いて自分が知らなかったことを知り、それに興味を持つことができました。新聞を読むことで知らないことがたくさん知れるので、新聞を読みたいと思いました。

(2) 課題

課題としては、次の2点があげられる。まず、新聞を活用した授業が学校全体の取り組みになっていないことである。次に、教科横断的な学びとして新聞が活用されていないことである。他教科や特別活動などでも、新聞活用の場面が増えるように、指導体制や方法を職員全体で模索していきたい。



第25回 NIE全国大会東京大会



Newspaper in Educator

ーともに生きる 新聞でつながるー オンライン開催！

大会プログラム

ライブ配信 2020年11月22日(日)13時30分～

※全体会はライブ配信(後日オンデマンドでも配信)、
分科会ほかは全体会終了後に配信開始

■全体会

13:00 受付(ログイン)開始

13:30 開会式

あいさつ: 日本新聞協会
文部科学省

山口 寿一 会長
長尾 篤志 初等中等教育局主任視学官
(萩生田光一大臣代読)

東京都教育委員会 藤田 裕司 教育長
東京都NIE推進協議会 竹泉 稔 会長

14:00 記念講演

演 題:「社会の声をつむぐ小説 伝える新聞」

講 師:真山 仁 氏(作家)

2004年『ハゲタカ』でデビュー。その他主な著作は、
『そして、星の輝く夜がくる』『神域』など



15:00 日本NIE学会との共同シンポジウム

テーマ:「ウィズコロナ時代にNIEで培う力～ともに生き、
つながるための資質・能力」

シンポジスト:

- 真山 仁 氏 (作家)
- 大滝 一登 氏 (文部科学省初等中等教育局視学官)
- 土屋 武志 氏 (日本NIE学会副会長、愛知教育大学教授)
- 本杉 宏志 氏 (東京都立青山高等学校主幹教諭、NIEアドバイザー)
- 水木智香子 氏 (足立区立西新井小学校教諭)
- 城島 徹 氏 (毎日新聞社教育事業室編集委員)

司 会:関口 修司 日本新聞協会NIEコーディネーター

16:20 終了

NIE全国大会

日本新聞協会が1996年から毎年、
NIE(新聞を活用した教育)に関心
のある教員らを対象に開催。NIE
の実践や知見を広く共有すること
を目指しています。

主 催 日本新聞協会
主 管 東京都NIE推進協議会
協 力 朝日新聞東京本社 毎日新聞東京本社 読売新聞東京本社 日本経済新聞社 東京新聞
産経新聞東京本社 共同通信社 時事通信社
特別協力 日本大学文理学部 十文字中学・高等学校 日本NIE学会
後 援 文部科学省、東京都教育委員会、世田谷区教育委員会、豊島区教育委員会、全国学校図書館
協議会、文字・活字文化推進機構、全国新聞教育研究協議会、全国連合小学校長会、全日本中
学校長会、全国高等学校長協会、東京都立小学校長会、東京都中学校長会、東京都立高
等学校長協会、東京私立初等学校協会、東京私立中学高等学校協会、東京都小学校PTA協議
会、東京都立中学校PTA協議会、東京都立高等学校PTA連合会、東京都小学校新聞教
育・NIE研究会、東京都中学校新聞教育研究会、東京都高等学校新聞教材開発研究会

オンデマンド配信

11月22日(日)16時20分～ 視聴可能

■分科会(計10コマ)

- 〈小学校〉
- ①「学校全体で取り組むNIE～新聞をフル活用」
■国分寺市立第五小学校
 - ②「持続可能な言語能力の育成」
■江戸川区立南篠崎小学校・堀口友紀主幹教諭
 - ③「課題発見解決能力の育成～新聞で社会とつながる」
■文京区立関口台町小学校・矢野篤彦教諭
- 〈中学校〉
- ④「新聞を活用して意見形成を図る実践」
■世田谷区立船橋希望中学校・渡邊是能教諭、末松紗歩教諭
 - ⑤「新聞を通して社会を見つめる」
■世田谷区立喜多見中学校・木村要介教諭
■練馬区立石神井東中学校・向井哲朗主任教諭
■豊島区立明豊中学校・佐久間伸昭教諭
 - ⑥「言葉を見つめる～新聞の写真を題材に俳句を創作する」
■町田市立真光寺中学校・山田慎一主幹教諭
- 〈高校〉
- ⑦「実社会と国語を結び付けるための授業～NIEの実践を通して」
■東京都立第三商業高等学校・高倉愛理沙教諭
 - ⑧「新聞で世界とつながり共に考えるNIE～多国籍生徒たちの挑戦」
■東京都立新宿高等学校・高橋伸明教諭
 - ⑨「18歳成人とNIE～大人になることについて考えよう」
■東京都立荻窪高等学校・代田有紀主任教諭(NIEアドバイザー)
- 〈特別分科会〉⑩行政を挙げたNIE活動の取り組みの紹介(世田谷区、北区)

■解説動画「NIE はじめの一步」

誰でもいつでも簡単に始めることができるNIE(新聞活用)について、その魅力や意義も踏まえて新聞協会の関口修司NIEコーディネーターが語ります。NIEは学校だけでなく家庭で取り組むことも可能です。明日からNIEを始めてみませんか？

※各動画は、11月22日(日)から21年2月28日(日)まで視聴できます

参加費

◇教育関係者(元教員・一般含む)＝無料

※希望者には、資料集(大会後に作成)を1,000円(税・送料込み)でお送りします

◇新聞・通信社および新聞販売関係者＝2,500円(資料代含む)

申し込み方法

新聞協会NIEウェブサイト(<https://nie.jp/conference/>)にて、11月30日(月)まで申し込みを受け付けます

※申し込みいただいた方にID・パスワードをお知らせします

問い合わせ先: 日本新聞協会新聞教育文化部NIE担当
(電話:03-3591-4410、e-mail:nie2020tokyo@pressnet.or.jp)



第25回NIE全国大会・東京大会(オンライン開催)に参加して

(2020年11月22日・東京都千代田区)

つながり持てる重要媒体

■鳥取県NIE推進協議会長（鳥取大学名誉教授） 藤田 安一

コロナ禍の影響で、人と人との接触を避ける傾向が生まれてきた。この人間本来の営みとして重要な行為が制限された時、どのような病理や弊害が生まれてくるのかを、今私たちは体験している。

時に孤立感を深めざるをえない状況下で、社会と自分、人と人がつながっているという思いを持つことができる重要な媒体の一つが「新聞」だ。本大会のスローガン「ともに生きる新聞でつながる」は、まさにこの時期にふさわしいと言える。

記念講演は、新聞記者の経験があり、経済小説『ハゲタカ』シリーズで知られる真山仁氏。彼の講演から次の話が印象に残った。

「コロナで社会が傷ついたら悲観するだけでは駄目だ。コロナのために、これまでの医療体制など社会の弱点が浮き彫りになった。この点を気付くきっかけを、コロナが社会に示したと受け止めるべきだ」。同氏はさらに、シンポジウムでも次のように述べた。

「これまでの社会は無駄を極度に排除してきたが、無駄こそまさかの際に対応する力だ。コロナ禍をきっかけに、このまさかの時に備えることのできる余裕のある社会になってほしい」と。

新型コロナウイルスの感染拡大は、経済的効率性を最優先にしてきたわが国の社会に深刻な反省を迫っている。私にとって今回のNIE全国大会は、コロナ体験を無駄にせず、人間の命と生活を第一に考える社会に転換するため、新聞に何ができるのかを考える好機となった。

学びに効果的な教育活動

■鳥取県NIE推進協議会アドバイザー 岩井 克之

楽しみにしていた東京での全国大会は、コロナ禍のためオンラインでの開催となった。来年の2月末までオンデマンド配信されるので、例年より参加者が増えるかもしれないが寂しさは残る。

基調講演では、SNSなどで得られる情報もそのベースは新聞と聞き、きちんとした取材をもとに客観的な事実を伝える新聞の重要性を再確認した。問題意識を持ち社会とつながるきっかけは新聞であってほしい。

シンポジウムでは、新聞を活用した教育活動を受けた子どもたちほど、社会の変化（記事）に関心を持つと報告された。コロナ禍の中で、社会の動きに関心を持つ姿勢、正確な情報を読み取る力、思いやりの心を持って生きる力が一層求められている。NIEは、このような

学びを深める最も効果的な教育活動と考える。

改めてNIEがさらに広がり、発展することを願っている。

新聞活用し社会に関心

■鳥取市立逢坂小学校 教諭 泉 政則

本年度の東京大会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、全プログラムがインターネット配信になった。その内、東京・国分寺市立第五小の実践を紹介したい。

全校で取り組む「NIEタイム」では、“好きな写真や絵を切り抜く”“記事に題名を付ける”などして、新聞に親しむ活動を多く組み込んでいたり、記事を読んで分かったことや自分の感想を書いて友達と意見交換を行っていた。

「授業実践」では、“授業で学んだ片仮名を新聞から見つける学習”“二つの新聞の共通点や違いを見つけて学習”“写真を撮ったり記事を書いたりして自分自身で新聞を作り上げる学習”などが、とても参考になった。

今後も、新聞活用を学校教育に取り入れ、社会に関心を持ち楽しんで学習できる機会を増やしていきたい。

コロナ禍でもつながる

■青翔開智中学校・高等学校 司書 横井 麻衣子

初のインターネット配信となったNIE全国大会。シンポジウムでは「ウィズコロナ時代にNIEで培う力」と題し、さまざまな実践発表が行われた。ある高校教諭からは、小中高の児童・生徒が同じ新聞記事を読み込み、交換日記のように意見交換を行って考えを深めるという校種を超えた取り組みが紹介された。オンラインツールを使えば自宅でも実践可能で、コロナ禍でも「新聞でつながる」NIEの可能性が示された。

新聞は子どもたちが社会と時代を読み解くための重要なメディアのひとつだが、全国一斉休校の際には家庭で新聞を購読していない生徒が新聞に触れる機会が一気に閉ざされてしまった。学校外からも新聞記事をインターネット上で検索・閲覧することができるサービスが広がれば、前述のような新聞記事を活用した学びに生かされるのではないかと期待している。

生徒が思考する授業を

■鳥取県立八頭高等学校 教諭 下谷 慎一

バブル崩壊後の日本について語る際「『ハゲタカ』を読んでもください」と生徒に伝える。今大会で記念講演をされた真山仁さんの小説だ。事実寄り添って書かれた真実の物語がある。講演では新聞離れしている若者たちの現状が語られた。

彼らは「新聞は偏っている、SNSで手に入る情報こそが必要で正しい情報なのだ」という。

そこには自身の考えに親和的な情報が落ちている。生徒たちにとって、SNSの影響力は圧倒的だ。しかし、それでは社会を批判的に見たり、想像力を膨らませたりすることにつながらない。

取材によって事実を積み重ね、それがストックされていく新聞。まずは事実を知ることによって世界を広げる。社会を切り開いていく思考が生まれるのはそれからだ。新聞をきっかけに生徒が思考する授業を展開していきたい。

どこから読んでもいい

■鳥取県立岩美高等学校 教諭 栗原 由紀子

新聞をどこから読めばいいの？。本校の生徒の声だ。これに対する解決策を真山氏の基調講演から得た気がする。それは、新聞を読む視点「目」だ。まず「常識を疑え」という視点だ。「果たして本当にそうなのか？」という探究心が大事だと真山氏は述べる。

また真山氏は「虫の目」「鳥の目」という表現も用いる。虫は地をはいつくばり、鳥は天空を舞う。当然狙う獲物の見え方も違う。社会現象もさまざまな視点でフォーカスすると、異なった像を結ぶというわけだ。

最近、SNSで簡単に情報が手に入る。しかしそれは「自分が信じたいものだけを正しいと信じる」場であり、現実の「複雑な社会」を必ずしも反映していない。その点新聞は「社会の声をつむぐ小説」であり、社会の縮図だ。だから生徒には「新聞はどこから読んでもいい。すべての記事に生きるヒントが隠されているから」と伝えてあげたい。虫と鳥の話と一緒に。

鳥取県N I E推進協議会 会則

(目的)

第1条 鳥取県N I E推進協議会（以下、協議会という）は、NIE（Newspaper in Education）の略称にちなみ、教育界と新聞界が協力し、新聞を生きた教材として活用し、現代社会に対応した情報能力を育成する教育を進めていくことを目的とする。

(事業)

第2条 協議会は前条の目的を達成するため次の事業を実施する。

- (1) N I E実践校・実践者を日本新聞協会に推薦すること。
- (2) N I E実践校・実践者への研究補助に関すること。
- (3) N I Eに関する研究会を開催すること。
- (4) N I E実践・研究成果の紹介や普及に関すること。
- (5) そのほか必要と認めたこと。

(構成)

第3条 協議会は次に掲げる者で構成する。

- (1) 学識経験者
- (2) 鳥取県教育委員会
- (3) 市町村教育委員会教育長会
- (4) 鳥取県小学校長会
- (5) 鳥取県中学校長会
- (6) 鳥取県高等学校長協会
- (7) 鳥取県私立中学高等学校長会
- (8) N I E実践指定校
- (9) 日本新聞協会
- (10) 朝日新聞社鳥取総局
- (11) 毎日新聞社鳥取支局
- (12) 読売新聞社鳥取支局
- (13) 産経新聞社鳥取支局
- (14) 日本経済新聞社鳥取支局
- (15) 中国新聞社鳥取支局
- (16) 山陰中央新報社鳥取総局
- (17) 新日本海新聞社
- (18) 共同通信社鳥取支局
- (19) 時事通信社鳥取支局

(役員)

第4条 1、協議会に次の役員を置き、総会で会員の中から互選する。

- (1) 会 長 1名
- (2) 副会長 若干名
- (3) 幹 事 若干名

(4) 監 査 2名

2、役員任期は事業年度の期間とする。ただし再任は妨げない。

3、役員任期は次の通りとする。

(1) 会長は協議会を代表し、会務を総括する。

(2) 副会長は会長を補佐し、会長が欠けたときは副会長の1名が職務を代行する。

(3) 幹事は会務を処理する。

(4) 監査は会計を監査する。

(総会)

第5条 1、協議会は、事業計画のほか運営に関する重要な事項を決定するため毎年1回定期総会を開くほか、次の場合に開催する。

(1) 事業の実施状況の報告。

(2) 会長が特に必要と認めたとき。

2、総会は会長が招集し、その議長となる。

(委員会)

第6条 特定事項について検討審議するため、委員会を置くことができる。

(経費)

第7条 協議会の運営に関する経費は、会員新聞社・通信社の拠出金および個人、団体などからの補助金、その他の収入を充てる。

(事務局)

第8条 協議会の事務局は新日本海新聞社内に置く。

(事業年度)

第9条 協議会の事業年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

(補足)

第10条 会則の変更は総会の議決を経なければならない。この会則に定めのない事項は、会長の承認を経て委員会に諮り決める。

(付則)

1 会員新聞社・通信社の拠出金は当面、新聞社が1社年額6万円、通信社が1社年額3万円とする。

以 上

「出前授業」 募集のご案内

鳥取県 NIE 推進協議会は、県内の小中高校を対象に新聞記者を講師として派遣する「出前授業」を行っています。

新聞を教材として「新聞の基礎知識」「新聞の読み方」「新聞編集」「新聞記者の仕事」などについて授業を行うほか、新聞記事の作成体験などを通して、児童生徒に知識や技術を伝えていきます。

※内容は一部変更となる場合があります。



出前授業のお問い合わせ・お申し込み

鳥取県NIE推進協議会事務局(新日本海新聞社読者センター内)

電話0857(21)2877(9:30~17:00、土日祝除く)



教育に新聞を
Newspaper in Education

発行2021年6月22日

鳥取県NIE推進協議会

事務局

〒680-8688 鳥取市富安2丁目137
(新日本海新聞社読者センター内)

TEL 0857(21)2877 FAX 0857(21)2891